

## P.A. ソローキン

高度に都市化した社会の「都市・農村」の統合社会学から

山本 努

熊本大学大学院人文社会科学部 教授

今日、日本の人口の9割以上は都市に住むが(2015年国調)、都市だけでは日本の社会は永続しないだろう。このことを示した地域社会学の学説は少ないが、ソローキンの指摘は重要である。

ソローキンは高度に都市化した社会の将来を予測して次のようにいう。「超都市化した社会の将来はどのようになるのか。その答えは、その高度に都市化した社会が農村の後背地を持つか、持たないかによるところが大きい」。そして、農村の後背地が充分にある場合には社会の存続に問題はないが、「もしも農村の後背地が少な過ぎるならば、又は、農村地域が半農半都市化(rurbanized)しているならば、社会の安定性は著しく危険なものとなる」。

その理由は、「都市化した地域は、出生率が非常に低くなるからである。また、僅かな農村の後背地は既にかなり半農半都市化しているのであれば、同じく出生率が非常に低くなる」。その結果、「人口が減少するようになり、その社会はそこから徐々に、あるいは、急激に死滅する」。つまり、「充分な農村の後背地を持たない、高度に都市化した社会(a highly urbanized society with an insufficient rural hinterland)」が安定的に存続するのは難しいのである(ソローキン, 1940: 362-367, 引用は山本が抄訳)。

ここにあるのは「半農半都市化(≒都市化)」→「出生率減少」→「社会の消滅」という社会過程の指摘である。この事態は、東京の「ブラックホール現象」と「地方消滅」から死滅に向かう「極点社会」(増田, 2014) とほぼ同じ認識であり、現代の日本社会に非常に近い。但し、ソローキンの半農半都市化というアイデアは、はるかに人類史的な視点を持つ。

地域社会学の分野で、ソローキンの貢献は色々あるが、少なくとも次の2点は重要である。(1) 都市・農村をセットで捉えようとした。このような試み

は、都市・農村の統合社会学というべきである。(2) しかもそれを、農村化した都市(但し、これは微弱なくらいかもしれない)と、都市化した農村(これは大いに進んだ)の人口交流というユニークな視点で捉えようとした。(1) のような試みは、アメリカ都市社会学にはほとんど見られない。むしろ、日本の都市社会学(鈴木栄太郎や矢崎武夫)が近いが、(2) の発想はなかった。

以上の貢献はまさに、地域社会学の「不朽の参考文献」(オーダム, 1955: 552) という評価が正しい。但し、ソローキンの本領は観念論的有機体説にあり、「結局のところ実証主義の圏内に入らなかった」とも言われる(マーチンデル, 1970: 144)。とはいえ、ソローキンのアイデアが今日の実証研究の淵源となっているものは多い。都市・農村社会学は勿論、利他行動論、災いの研究、移動論、階層論、時間論などがそれである。これらのアイデアの豊富さは、「批判者となった」弟子マートン(大野他, 2014: 54)の「中範囲の理論」を彷彿とさせる。ここでも、今日の実証的社会学の重要な淵源になっている。

## 文献

マーチンデル, D, 1970, 新睦人他訳『現代社会学の系譜(上)』未来社。

増田寛也, 2014, 『地方消滅』中央公論新社。

オーダム, H, 1955, 横越英一訳『アメリカ社会学』法政大学出版局。

大野道邦他, 2014, 『ソローキン再訪』書肆クラルテ。

Sorokin, P.A. and C.C. Zimmerman, 1939, Principles of Rural-Urban Sociology, Henry Holt and Company. (=京野正樹訳, 1940『都市と農村—その人口交流』巖南堂書店)。



Column  
調査の  
達人

## 喜多野清一

初期の試行錯誤と晩年の名人芸

池岡義孝

早稲田大学人間科学学術院 教授

喜多野清一(1900-1982)は、戦前から農山村での社会調査を行い、とくに同族と親方子方研究に先鞭をつけた。また戦後は、恩師の戸田貞三の立場から有賀喜左衛門との間で有賀・喜多野論争を展開した、日本における農村社会学と家族社会学の先達の一人である。

喜多野は、欧米留学から帰国した戸田が東京帝国大学で指導した最初の学年の一人だったが、当初は社会学になじめず、ましてや社会調査は遠い存在だった。喜多野の関心は日本資本主義がもたらした日本社会の危機や問題状況にあり、左翼系学生団体である「新人会」に加入して実践活動も行い、もっぱらマルクス主義や経済史の文献を渉猟していた。喜多野の関心が日本の農村に向かう契機となったのは、日本資本主義論争である。喜多野が精読したヨーロッパのマルクス主義や経済史の文献が、日本資本主義論争で争点となっていた従属農民の存在と封建的地代の関係、地主—小作関係などを考えるベースになったからである。

しかし、すぐに農村調査に着手したわけではない。関連する文献研究をさらに深めただけでなく、恩師の戸田貞三ばりに当時最新の昭和5年の国勢調査報告の府県編のデータから、農民の階層分化の指標となる農業労働者数を計上するなど、マクロデータの二次分析にも取り組んだ。このように喜多野は、さまざまなアプローチを試みて、もうこれ以上は実際に村に入ってみなければわからないというところまで自分を追い込んでから、ようやく村に入ったのである。村に入ると決めてからもさらに慎重に、柳田国男の日本民俗学の諸研究を学び、鈴木栄太郎に導かれてアメリカ農村社会学のコミュニティ研究の成果を吸収し、戸田貞三らが主催した「分家慣行調査」で鈴木から実地調査の手ほどきを受けて、ようやく村に入ることになる。そうした村の調査の戦前の成果が、「甲州山村の同族組織と親方子方慣行」(『民族学年報』第2巻、1940年)に結実する。



ヴェーバーからも参考にしながら精緻な論文を書いた喜多野だが、それは農山村を対象にしたインテンシブな社会調査に裏付けられていた。では、喜多野自身の調査はどのようなものだったのか<sup>1)</sup>。喜多野のスタイルは、農家を訪問しても質問をして調査をするという感じではなく、ふつうに世間話をしているうちに相手がいつの間にか自然にいろいろなことを話してくれるようになり、重要な文書も見せてくれるという不思議なやり方だった。村人たちは、喜多野のあの悠揚迫らぬ物腰と、人の話を聞いてホッホッと笑う屈託のない笑顔を前にすると、自然にそのような気持ちになったのだろうか。喜多野は自分のこのやり方は、恩師の戸田とは正反対のものだと言っていた。戸田の調査の手法は、どちらかというと命令口調風のもので、喜多野はそれを反面教師にして戸田とは違うスタイルを身につけていったのだろう。戸田はどうもインタビュー調査は苦手だったようだが、喜多野はインタビュー調査の達人で、晩年には名人芸の域に到達していたのである。

こうした喜多野の調査は時間がかかり、長時間に及ぶこともまれではなかった。遅筆でも知られていた喜多野だが、試行錯誤の末に確立した研究テーマと調査手法を固く信じて、じっくりと時間をかけて慎重に調査と研究を進めたのだろう。

### 注

- 1) 私は喜多野の調査に同道したことがないので、喜多野の調査をよく知る正岡寛司先生(早稲田大学名誉教授)に話をうかがった。正岡先生は、1964年に大阪大学を定年退職して早稲田大学文学部教授となった喜多野と、山梨県下の村落を中心に10年ほど共同で「家と親族研究」のプロジェクトを主催して、晩年の喜多野の調査手法を間近に見ていた。